

平成21年度大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会
ニホンジカ保護管理部会（第1回）
議事概要

◆日時 平成21年11月6日（金）14：00～16：30

◆場所 奈良市 春日野荘 天平の間

◆出席者

1. 委員

柴田 叡式	名古屋大学名誉教授
高橋 裕史	(独)森林総合研究所関西支所生物多様性グループ
高柳 敦	京都大学大学院農学研究科 講師
田村 義彦	大台ヶ原・大峰の自然を守る会 会長
鳥居 春己	奈良教育大学付属自然環境教育センター 准教授
村上 興正	元京都大学 講師
横田 岳人	龍谷大学理工学部環境ソリューション工学科 准教授

2. 関係機関

鳥谷 和彦	近畿中国森林管理局三重森林管理署 流域管理調整官
松田 繁樹	奈良県農林部森林整備課
明石 一郎	三重県環境森林部自然環境室
南 友二	上北山村建設産業課 主事
森岡 哲也	吉野きたやま森林組合総務課 参事(御欠席)
福西 貢	奈良県獣友会上北山支部 会長 (御欠席)
中世古 太輔	社団法人三重県獣友会 (御欠席)

(以上敬称略)

3. 事務局

池田 善一	近畿地方環境事務所 所長
佐々木 仁	近畿地方環境事務所 統括自然保護企画官
杉田 高行	近畿地方環境事務所 国立公園・保全整備課長
上村 邦雄	近畿地方環境事務所 野生生物課長
櫻又 涼子	近畿地方環境事務所 自然保護官
樋口 高志	(株)環境総合テクノス 環境グループ マネジャー
黒崎 敏文	財団法人 自然環境研究センター 第一研究部 部長
荒木 良太	財団法人 自然環境研究センター 第一研究部 部長代理

◆議事概要

今年度の座長については村上委員を選出

1. ニホンジカ個体群動態の保護管理に係る事業概要、平成 21 年度モニタリング調査実施

項目について

- ・特になし

2. 平成 21 年度個体数調整実施状況について

既存捕獲手法の向上くくりわなによる捕獲について

- ・ようやく目標捕獲頭数に近い捕獲数を捕獲できるようになり、次の段階に進める状態になってきた。これは評価に値することである。しかし、植生回復のための適正生息密度の検討、捕獲内訳（メスの捕獲数）を考慮したシミュレーションの実施、推定生息数の再検討、ミヤコザサのササ刈り等の環境管理による抑制等、新たなステップに向けた具体的検討の段階に入った。こうした検討課題について、ワーキンググループで順次検討していきたい。
- ・平成 21 年度個体数調整実施状況（資料 2-1）については単位努力量あたりの捕獲数がわかるように、表に CPUE（捕獲努力量）等を追記して頂きたい。
- ・資料 2-2、図 1 にある「撮影枚数」は、撮影頻度を表す指標として用いているのであれば、「撮影回数」と示した方が適切である。
- ・資料 2-2、図 2 について、くくりわな設置地点②では、シカが多く確認されているにも関わらず、捕獲されていない。くくりわなによる捕獲を継続的に実施している場所で捕獲数が少ないとことであれば、今回の解析とあわせて、過去の捕獲履歴についても解析を行ってほしい。
- ・資料 2-1、表 1 について、推移行列を用いたシミュレーションを行っているが、メスの捕獲数が重要になってくることから、シミュレーション結果はオス、メスがわかるように計算、表記していただきたい。

3. 新規捕獲手法の検討について

- ・装薬銃の捕獲効率向上の検討も必要である。他の地域で実施されているように、少ない人数で同じ従事者が長期間実施するといったことも検討してはどうか。
- ・餌で誘引する際、乾草を用いると効果があるが、外来の種子を導入する可能性がある。移入種による環境にダメージを与えない誘因手法として、実りの時期のえさをため込み、利用するという事例があるが、コストが高いため、現実的には難しい。
- ・ハイシートの利用に当たっては、過酷な条件下での使用となるため、実際に従事するハンターの意見を確認する必要がある。
- ・ハイシートは欧米で実用されている例があるので、事例収集を行ったほうが良い。

4. ニホンジカの個体数調整について（11月～12月）

- ・夏期の密度の把握が重要とされていることから、くくりわなの試験等においてわなの見回りを行う際に、ニホンジカの目撃頻度を記録すれば、低コスト実施可能なで密度指標となるのではないか。

5. GPS 首輪による個体移動状況調査について

- ・三重県側で耳標をつけた死亡個体が確認された事例がある。こうした情報収集は重要であるため、関係機関等に情報収集の周知を行ってはどうか。過去にも周知を行っていた。
- ・GPS のデータについては、まだ解析中である。季節別の標高移動状況のタイプ分けや等は慎重に行う必要があるため、結論を出すにはさらなる検討が必要である。
- ・資料 3 図 2 について従来からの資料と照合できないので、各図や個体ごとの表現を統一してわかりやすくするべきである。また、高標高地、低標高地の定義を明確にする必要がある。
- ・柴田委員のグループが過去に実施したテレメトリー調査の結果もあるので、過去のデータ等を活用して解析を行ってほしい。

6. ニホンジカの生息密度調査について

- ・植生へのインパクトが最も高くなる夏季の生息密度を把握することが重要である。夏の密度を把握する方法を検討するため、方法やコストを含めた整理が必要である。
- ・図 3 のグラフを見ると平成 17 年にルート 1、ルート 2 では生息密度が低下しており、ルート 3 では増加している。生息密度の推移を検討する際は、調査地周辺の防鹿柵の設置時期、餌量の影響等の環境要因を把握することが必要である。
- ・調査方法、調査時の天候等、必要な情報はきちんと記載する。

7. 平成 21 年度植生保全対策概要について

- ・単木保護対策については、ラス巻きという表現を使われているが、ラスとは本来素材の名称である。プラスチックを使う場合、ラス巻きという表現は適切ではないので、一般的な表現方法とそれぞれの表現方法を整理する必要がある。
- ・下層植生の経年変化を示して議論したい。これはニホンジカ保護管理部会だけでなく森林生態系部会等とともに議論すべき内容である。

8. 平成 21 年度大杉谷国有林におけるニホンジカの生息状況、及び森林被害の現状把握について

- ・広域管理を行う上で、密度調査等の結果を共有することは重要である。調査結果を比較可能にするため、事前に調査設計を調整することが非常に重要である。

[文責：近畿地方環境事務所]